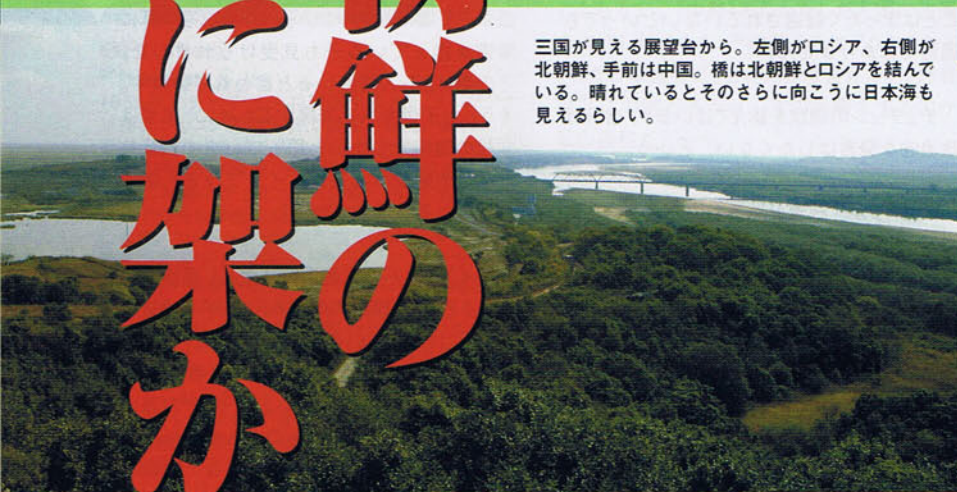


国境を往く

# 中国と北朝鮮の 国境に架かる橋



三国が見える展望台から。左側がロシア、右側が北朝鮮、手前は中国。橋は北朝鮮とロシアを結んでいる。晴れているとそのさらに向こうに日本海も見えるらしい。



もともと地球上に国境などなかった。  
しかし「国境」という一本の線が引かれたことにより、  
そこは端になり、辺境の地となった。  
「国家」という概念で世界を分断する「国境」は、  
地球上で最も人為的な「線」といえるかもしれない。  
日本にとって意識せざるを得ないふたつの国、  
北朝鮮と中国の国境を歩いてみた。

## 三国の国境と一本の橋

中国東北部、吉林省東端の琿春(フンチュン)からさらに南東へ、道は真っ直ぐに延びていく。左側の粗末な橋の向こうはロシア、右側の川を越えれば北朝鮮。その間に細長く続く中国の大地を直進すると、展望台に着く。そこから三国が同時に見渡せるのだ。晴れていれば、その先に日本海が見えることもある。

北朝鮮と中国の国境をなす川の上に一本の橋を見つけたのは、その帰り道のこと。北朝鮮は他国から隔絶された別世界のよう考えていたので、二国をつなぐ橋が不思議な光景に見えた。本当にここから北朝鮮に行けるのか。

「行ける」

圈河口岸(ジュエンハアコウアン)と記された国境の門衛は、そう断言した。さらに「外国人も行ける」とも。それが本当ならば、ぜひ行きたいと思った。メディアから伝え聞く北朝鮮といえば、ほとんどが「恐怖の国」といった類のものばかりだ。思い浮かぶ映像も、そのイメージを増幅させる軍隊のパレードの様子や飢えた人々の姿などしかない。少しでも生の様子が見てみたかった。翌日、国境越えを試みた。

しかし、その日の門衛は「国境は渡れない」と言う。「ばっと見てすぐに戻ってくるから」と食い下がり、なんとかか中に入れてもらった。交渉というより無茶苦茶な懇願だったが、なぜかその方法で次々と中国側の国境職員を説得することに成功し、午前11時過ぎ、正式に中国を出国できた。

北朝鮮へつながる橋の前までたどり着くと、中国側最後の番人は、「11時から昼休みに入るので橋は渡れない。2時間待て」と告げた。しかし、橋の上にはまだトラックが走っているのではないかと……。

番人が「北朝鮮と中国には1時間の時差があって、双方で国境を閉める時間が異なる」と説明したので、「じゃあ、北朝鮮側が閉まっているかどうか、自分で橋を渡って見てくるよ」と切り出してみる。すると、驚くべきことに彼は認めてくれたのだ。こうして国境の橋を歩いて渡ることになった。

## 北朝鮮の地に足を踏み入れる

橋の上は静かで、風の音しか聞こえなかった。

北朝鮮の緑の大地と、両国が共有する青い空を正面に見て直進する。「いきなり撃たれるんじゃないか」といった偏見に満ちた不安をよぎらせながら、落ち着かない気持ち

で歩いた。たった数百メートル、5分ほどの距離が、随分と長かった。

橋の中間を示す赤いラインを越えて北朝鮮側に入り、橋の終わりにある小さなゲートまで行き、まだ幼さの残る少年の守衛と対面した。

「ちょっとだけ観光に来た。通っていいか?」と聞くと、彼は片言の中国語でただ「だめだ」と答えた。しかし何度も懇願すると、少年は「仕方ないな」というような笑顔で突然、通してくれた。

通るはずもない強引な交渉が次々に成功していくことに、これが幸運なのか不運なのかと考えながら、ついに北朝鮮の陸地に足を踏み入れることができた。

周囲には緑あざやかな畑と丘が広がるだけ。正面の入国審査の建物に入っていく。建物の薄汚れたガラスの向こうに、金正日と金日成が描かれた真っ赤な絵が見えたとき、ここは北朝鮮なんだということを実感した。

建物の中は、昼休みのために全く機能していなかった。壁に書かれた文字や金親子の肖像画を写真に取めながら、しばらく待った後、残念だがここまでが限界だろうと考え、戻ることにした。30分ほどで戻らないと中国側の国境が本当に閉まってしまうからだ。早く帰りたいという気持ちも大きくなっていた。



琿春のある吉林省東部一帯は、延辺(えんべん)朝鮮族自治州という。朝鮮族の多い地域で朝鮮語表記は至るところにあるが、琿春にはロシア語表記も見られる。



等間隔に立つ低い棒が作る柵の向こうがロシア。こちら(中国)側の道からたった10メートルぐらいの距離。



入国審査の建物の中。「先軍の威力で社会主義強大国を建設し、新しい飛躍を成し遂げよう!」と書かれている。「先軍」とは、「軍を党より優先させる」という意味の北朝鮮の言葉。

入国審査の建物の中で隠し撮りしたもの。





中国側の国境、園河口岸の入り口。



国境の橋の途中で。川の向こうは北朝鮮。

## 国境を越えたことの意味

橋に着くと、また問題が生じた。出国のためには書類が必要なことが判明し、再度、例の建物に戻らされたのだ。

先の男性らに助けられながら必要書類を調える。最後のサインをなかなかくれない無愛想な職員に「早くしてくれ」と要求し、そばにいた中国人に「余計なことは言わない方がいい」と真剣な顔で止められたとき、緊張はピークに達した。隠していた携帯が見つからないことを願いながら、じっと待った。

書類集めを始めて1時間。すべてが揃い、橋を渡るバスに乗りこみ、数百メートル向こうの中国へ向けて走り出したとき、何年も帰ることのなかった故郷へ向かうかのような大きな安堵感に包まれた。

北朝鮮側では何ひとつ理不尽なことはなかったにもかかわらず、予想以上に不安にからめとられてしまった。それはメディアから得た北朝鮮に対するイメージが、いかに染みついているかを物語るものだった。自分自身の足が震える音を、国境の向こうで聞くことになった。

このわずかな経験によって北朝鮮の何がわかったわけでもない。が、「北朝鮮」という言葉を聞いたときに、テレビ以外の映像を思い浮かべられるようになったことだけは確かだ。赤や青などの鮮やかな服装で、緑の畑のそばをじゃれあいながら歩く子どもたちの姿。そんな様子がいま、頭の中を駆け巡る。

Text by: コンドウユウキ

今回渡った国境の橋を中国側から見たところ。

## 突然聞こえてきた日本語

橋まで戻ってみると、橋の前にある北朝鮮側のゲートがすでに閉まっていた。さっきと同じ少年の守衛に「帰りたい」と頼んだが、今度はまったく妥協を見せぬ厳しい顔で、「だめだ、橋から離れる。戻れ」と先の建物を指差した。予期せぬ展開に不安が走った。そうして重い足取りで戻っていったときのこと。いきなりネイティブの日本語が聞こえてきた。「日本人ですか？」声の主は、建物の前に座っていた初老の男性。こんなところでなぜ——と思ったが、びくりにしていたのはむしろ向こうの方だった。

「なんでこんなところ？ 招聘状はあるの？ ここまでどうやって……？」

経緯を話していたところにちょうど私の携帯が鳴ると、「携帯？ まずいよ！ 電源切って、隠して！」と彼はあわてて言った。写真撮影も言語道断とのことだった。その上、その前日(2006年10月3日)に北朝鮮が核実験実施宣言をして、いま日本では大騒ぎになっていることも聞かされて、不安はますます大きくなった。

男性は、ビジネスで北朝鮮を50回以上も訪れているという在日朝鮮人だった。彼もちょうど中国側から国境を渡ってきたところだという。北朝鮮パスポートを持つ彼ですら入国するのはいろいろと面倒だということを

聞いて、自分がふらっと入国できるはずのないことを確信させられた。

待つ間、彼はいろいろな話を聞かせてくれた。

「弟は北朝鮮に住んでいます。彼が移住した当時、北朝鮮は「理想の国」とも思われていたんです」

この男性は、北朝鮮への経済的貢献が認められ14個の勲章をもらったという。彼が金正日と一緒に写っている写真を見せてくれたときは、そんな人物とここで出会ったことに不思議な縁を感じました。

2時間が経ち、ついに橋のゲートが開いた。彼に別れを告げ、晴れ晴れした気持ちで橋に向かった。そして歩きながら、写真には撮れない周囲の景色に見入った。

川沿いにはきれいに整った畑がある。「数百万人が餓死している」とも伝えられる状況がまったくイメージできないほど青々としていたのが印象的だったが、それはここが国境だからなのかもしれない。さらに、そのそばを10人ほどの集団をなして歩く子どもたちの楽しそうな姿も、鮮明に記憶に残った。

メディアではほとんど流されることはないが、当然この国でも日常的であるに違いないこんな普通の風景を見てやっと、北朝鮮という国の息遣いの一端を目撃できたような気がした。

